

《書評》

『教養としての歴史問題』

前川一郎*編著、倉橋耕平**・呉座勇一***・辻田真佐憲****著、
東洋経済新報社、2020年

木 畑 洋 一†

「新しい歴史教科書をつくる会」などの活動によって歴史修正主義が日本社会で注目を集めるようになってから、すでに四半世紀以上が経過した。この間、それに対する批判もさまざまな形で展開されてきている。公開シンポジウムの記録という意味をもつ本書『教養としての歴史問題』も、そのような試みの一つであり、個性豊かな4人の論客が、従来の議論では必ずしも十分に論じられてこなかった視点を提示している。短いながらもかなりの迫力をもった本である。

歴史修正主義の内容に正面から取り組んでいるのが、「はじめに」および第2章（「植民地主義忘却の世界史」）、第3章（「なぜ“加害”の歴史を問うことは難しいのか」）を執筆した編者の前川一郎氏である。歴史修正主義者たちは、日本の植民地支配が引き起した問題を否定したり矮小化したりして、植民地支配を正当化する議論を展開しているが、前川氏は、それは国際社会のなかに大きく広がっている傾向（「植民地主義忘却の世界史」）の一環であるとして、歴史修正主義を見るに当たって世界史的視座が必要であることを強調する。これは、永原陽子氏が先導し、前川氏も加わった「植民地責任」論（永原，2009）につながる論点であり、日本の植民地支配をめぐる歴史修正主義について考える場合のアルファでありオメガであるといっても過言でない。手前味噌になるが、評者も1990年代の歴史修正主義台頭時に、その問題を世界史的視野で議論する必要性を、簡単に論じたことがある（木畑，1996；2000）。このきわめて重要な点を前川氏は精緻に分析しており、読み応えがある。

この「植民地主義忘却の世界史」に関わって、前川氏がさらに提起している興味深い論点が、「選別的思考」である。イギリス帝国支配の中で起こった個々の事件（たとえば1919年にインドで非武装の市民が大量虐殺されたアムリットサル事件）については問題があったとしつつも、その事件が生じたそもそもの歴史的な文脈である植民地支配全体については問題にしないという考え方が「選別的思考」である。個別の事件や時期に関しては歴史的反省を示す形がとられる場合でも、対象の深部に及ぶ根本的な反省が回避されるという状態が世界的に広がっていることに、前川氏は注意を

* 立命館大学グローバル教養学部教授

** 創価大学文学部准教授

*** 国際日本文化研究センター研究部助教

**** 作家、近現代史研究家

† 東京大学・成城大学名誉教授

kbty38@seijo.ac.jp

促す。そして、歴史修正主義とは一線を画しているかに見える、日本近現代史再評価論（満州事変以降の15年間は批判的に見てそれを近現代史の逸脱期ととらえる議論）にも、前川氏はそうした「選別的思考」の姿を見いだすのである。この点の指摘は、非常に重い。

こうした性格をもつ歴史修正主義が、四半世紀も続き、最近さらに猖獗をきわめているのはなぜか。その点に鋭く切り込んでいるのが、倉橋耕平氏による第1章（『歴史』はどう狙われたのか？）である。倉橋氏は、歴史修正主義が展開してきた経緯を抑えるなかで、歴史学に立脚した「文化生産者の評価が重視される歴史」から、人々が何を欲するかが決め手となる「文化消費者の評価が重視される歴史」への転換が生じたことに注目する。言い換えれば、歴史修正主義は広範な人々の間に広がる大衆文化に適合するような形で日本社会に浸透していったのである。倉橋氏は、歴史修正主義の特徴として、歴史事実の相対化と敵対性の創出、排外主義とのつながり、人権問題のすり替え、女性蔑視という性格を挙げ、さらに最近の状況として、それが縄文文化熱に見られる古代史への関心やスピリチュアル系出版と手を携えている点を指摘している。大衆文化、サブカルチャーのどのような襲にそって歴史修正主義が拡散していくかをよく見極めることは、それを批判する上で確かにきわめて重要であろう。

また歴史修正主義に立ち向かっていくためには、その批判がどのような手法で「文化消費者」の関心に応えていくかということに、十分留意しなければならない。第5章（「歴史に『物語』はなぜ必要か」）で、辻田真佐憲氏はその問題を扱っている。そこで鍵となるのは、「物語」性である。辻田氏は、「物語」を、「事件や出来事に意味づけを与え、ときに分かりやすく図式化し、人物の本質を生き生きと魅力的に描写することで、過去の事象と読者をなめらかに接続する技法、およびその成果物」と定義しているが、要するに、歴史の諸相をいかに生き生きと読者に伝え、「文化消費者の評価」に耐えるものにしていくかという問題である。歴史修正主義者は「物語」に長けているが、それを批判する側も良質な「物語」を提供することによって、彼らの「物語」の効用を抑止していくことが求められると辻田氏は言う。

歴史家がとるべき姿勢をめぐっては、呉座勇一氏の筆になる第4章（『自虐史観』批判と対峙する）も、著作が多くの読者の心を捉えた網野善彦氏の場合に即して議論している。1950年代初めに「歴史学を国民のものに」というスローガンのもとに推進された国民的歴史学運動の積極的活動家であった経験をもつ網野氏が、運動自体からは途中で離れつつも、後年になってもその志は肯定しつづけたというのが、ここでの一つのポイントである。そうした網野氏の考えは歴史学の本流には受け入れられず、「左派が国民的歴史学運動を破綻させて半世紀を経て、右が国民的歴史学運動を起している。左派が捨てた大衆的支持を右派が拾ったという構図」が見られるようになった、と呉座氏は指摘する。国民的歴史学運動がうまくいかなかったことによるトラウマが、網野氏が活躍した時期はともかく現在もお歴史学界に残っているという呉座氏の認識には疑問があるものの、歴史学の成果を人々によりアピールするものにしていくためには、こうした振り返りは有用である。

このような議論が展開された後、本書は著者4人による座談会で締めくくられている。コロナ禍のなかでのリモート座談会であるということであるが、すぐその前の第5章で辻田氏が、座談会にはさまざまな分野の人々との信頼関係醸成の場としての働きがあるにもかかわらず、座談会文化ともいえるものが近年衰退しているという指摘を行なっているのを受けた構成と見ることができる。このなかでは歴史教育の問題も改めて触れられているが、そこでの、学校だけが歴史教育の場ではないという辻田氏による指摘は、いうまでもないことではあるが、常に留意する必要がある。

日本という対象への網野氏の姿勢の変化についての呉座氏の説明など、注目すべき箇所は他にもいろいろあるが、以上、評者が重要であると考えた論点に絞って本書の議論をたどってみた。倉橋氏が紹介しているように、2020年には、歴史修正主義の立場に立つ人々が執筆した中学歴史教科書が教科書検定で不合格になる事態が生じた。また現行の教科書についても、これまでそうした教科書を採択していた横浜などの地区が不採択にするといった変化が生まれている。一見、歴史修正主義の攻勢は足踏みをしているようにも思われるが、書店に行って平積みされている歴史関係の書籍を見ればすぐに分かるように、その影響力は、実際のところ全く衰えをしらないといってよい。「はじめに」で前川氏が言い切るように、「私たちはいま、そんな歴史修正主義の時代に生きているのです」という認識をもつことは必要であり、本書は、その時代を生きるための一つのよい手掛かりとなる。

参考文献

- 木畑洋一（1996）「帝国主義の時代に植民地支配は当然だったのか」藤原彰・森田俊男編『近現代史の真実は何か』大月書店、37-44頁。
 ———（2000）『『国民の歴史』の西欧像と日本帝国主義』『教科書に真実と自由を』連絡会編『徹底批判『国民の歴史』』大月書店、240-250頁。
 永原陽子編（2009）『『植民地責任』論：脱植民地化の比較史』青木書店。

《書評者による追記》

この書評の初校を終えた段階で、本書執筆者の一人呉座勇一氏がツイッターアカウントで他者を傷つける発言を繰り返し、それを本人も認めて謝罪したとの報道に接した。氏が所属する国際日本文化研究センターも謝罪文を出している。問題となっている発言は、他者（この場合は女性研究者）に対する強い差別意識を示すものであるが、そのような差別意識は本書が批判の対象としている歴史修正主義の核心に存在する要素である。評者として呉座氏のこうした発言は絶対に看過しえないことを、付記しておきたい。研究者の倫理にもとるこうした言動が、すぐれた本に影を落としてしまったことが、残念でならない。

《本書编者による応答》

報道にありますように、本書執筆者の一人である呉座勇一氏が、研究者としてはもとより、人としてあるまじき女性蔑視発言をツイッター上で繰り返していた件、编者として痛恨の極みであり、「慰安婦」問題や人権、ミソジニーの問題も含めて、歴史修正主義の根幹をめぐって真摯に議論を積み重ねてきた多くの関係者に対する冒とくでさえある、と受け止めております。私自身は、本件が発覚するまで経緯を知り得ませんでしたが、とはいえ编者として己の不明を恥じるばかりです。

私としては、3月22日に本件について呉座氏本人に直接に抗議をし、加えて共著者の倉橋・辻田両氏とも意見を交換し、本件は本書の主張に反する許しがたい行為であるとの認識を共有しています。他方で、歴史修正主義を批判する論者が、強烈的な女性蔑視や差別意識を内に秘めていたことの深刻さを受け止め、歴史問題についていやまして真摯に向き合うことの必要性を痛感しております。